様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２５９１

研究課題名（和文）レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと〈近代文学〉の生成

研究課題名（英文）Retif de La Bretonne and the emergence of modern literature

研究代表者
森本　淳生（MORIMOTO, ATSUO）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：９０２８３６７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ（1743-1806）はブルゴーニュ地方の富農の息子として生まれ、印刷屋で徒弟修行をした後に作家となった。近代に識字率が上昇する中、西欧世界は「誰もが書き誰もが読む」新しい時代に突入したが、彼はこの大衆化のプロセスを代表する人物である。宗教的、貴族的な権威を持たず、ルソーのように高い文学的評価に恵まれることもなかったレチフは、民衆のように文学場の周縁に位置する存在であり、生計をたてるために書く近代的な意味での最初の職業作家だった。本研究はレチフの諸作品の精読と当時の文学伝統の分析を通して、18世紀後半にどのように「文学的モダニティ」が生成したかを示すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
レチフは従来あまり顧みられることがなかった作家であり、その膨大な著作が研究しつくされたとは言いがたく、モノグラフを試みることにはいまなお大きな意味がある。古典主義詩学が衰退し従来のジャンルが危機に陥った時代の中で、数多くのジャンルを横断・混淆するかたちで創作を行ったレチフを考察することは、この時代の変化の内実や19世紀以降の文学のあり方を把握するうえで大きな利点を持ち、文学とモデルニテの関係に対する理解を深化させるものである。また、レチフの虚構を含む自伝的作品を研究することは、現代において我々ひとりひとりが抱えている「自己との困難な関係」を捉え直す契機となりうるから、社会的な意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：Retif de La Bretonne (1743-1806) is born in a little village in Bregogne region as a son of a relatively rich farmer, and became writer after apprenticing himself to a master of printing house in Auxerre. As the literacy rate increased during the 18th and 19th centuries, the western world entered a totally new era in which "everyone writes and reads". Retif represents this popularization process of writing and reading, because, without any religious nor noble title, and always incapable of obtaining a high literary reputation like Rousseau's, he was precisely at the margin of the "literary field" just like someone belonging to the common people: he was indeed one of the first professional writers in the modern meaning who wrote and published to earn their living. This study shows how the "literary modernity" emerged in the late 18th century through a close reading of his novels and an analysis of literary traditions.

研究分野：フランス文学

キーワード：自伝　回想録小説　一人称小説　フィクション　文学場　マイナー文学　ピカレスク小説

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究以前においては、基本的に文学とモデルニテ（近代性／現代性）の関係を分析し、小林秀雄（1902-1983）やポール・ヴァレリー（1871-1945）について著書や論文を発表する一方、同じ関心のもと、ヴァレリーやジャック・ランシエールなどの翻訳も行ってきたが、そのなかで時代をより遡って考える必要を感じ、近代において爆発的に増殖した「生の表象」の実態とそれを可能にする種々の制度について 18 世紀から現代にいたる時期を対象に総合的に考察する共同研究「生表象の動態構造――自伝、オートフィクション、ライフ・ヒストリー」を組織し、個人の分担研究としては、近代的自伝の誕生期にあたる 18 世紀後半に活躍したレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ（1743-1806）を中軸に据えて、近代におけるエクリチュールの主体の生成や自伝とフィクションの関係についてあらためて考えることを試みた。本研究は、その延長線上で構想されたものである。

しかし、なぜレチフなのか。レチフはブルゴーニュ地方の農民の出身で印刷工としての修行を積み作家となった。18 世紀から 19 世紀末にかけては識字率が上昇し「誰もが書き、誰もが読む」時代が到来したが、そうしたなかで、宗教や血統による助けがなく、芸術的卓越性の面でもルソーのような評価を得られなかったレチフは――近年発掘されてきた農民・職人出身で自伝的テクストを残したジャムレー=デュヴァル、メネトラなどと同様――「庶民」がものを書くようになるプロセスを体現する存在だと考えることができる。宗教・血統・芸術にかんする後ろ盾なしに作品を書き、自分の「筆一本で」作家として身を立てようとしたレチフのうちには、近代的なエクリチュールの主体の生成にかかわる諸問題が集約的に現れているはずである。なぜなら、近代の文学的エクリチュールとは、超越的な審級を欠いたところに生成するものだからである。文学とモデルニテの関係は、いわばレチフという歴史的「起源」にさかのぼって考察する必要があるのではないか――これが本研究を着想した基本的なモチーフであった。

２．研究の目的

フランス 18 世紀は、政治的には官僚制的中央集権化を進める王権が高等法院との対立を激化させ、宗教的には自然宗教や無神論の台頭した時期であり、文学・芸術に関わる領域では、ルイ 14 世時代に確立された古典主義詩学が解体されて理性に対する感情の優位が説かれ、出版・ジャーナリズムが隆盛し公論（l'opinion publique）が成立するとともに、読者／公衆（le public）が成熟していくなかで作家の自律化が進み、文芸（belles lettres）から文学（littérature）への変化が起こった時代であった。こうしたプロセスについてはもちろんすでに膨大な研究の蓄積がある。レチフ研究についてはピエール・テスチュの古典的研究（『レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと文学的創造』）、日本における植田祐次の先駆的研究（『共和国幻想』）、『レチフ研究』誌掲載の諸論考などの研究が積み重ねられてきており、近年では、ベルクマンやル・ボルニュの充実した著作が刊行される一方、作品の批評校訂版が相次いで出版され研究の隆盛が見られる。

精神分析的な視角から父子関係の問題に着目するベルクマンは、レチフが父との系譜・相続関係に執着する一方で、父との断絶を欲望し「自己自身の息子」になるという自己産出を夢想していたと指摘し、レチフの錯綜したテクスト群が主体の欠如の周囲に紡がれるファンタスムの形成物であると論じている。ル・ボルニュは、古典主義的な諸ジャンルが解体していく時代状況の中で、文学場において周縁的位置にあったレチフは、ジャンルを交雑（hybridation）させて革新的な作品を書くことでアカデミーやサロンなど既成の制度に反抗し、しかるべき地位を獲得する戦略をとったと考える。本研究はこの両者の議論を批判的に受け継ぐことで出発点の仮説とした。すなわち、当時の文学場におけるレチフの周縁的位置に着目しつつも、両義性をはらむレチフのテクストを作家の地位獲得のための戦略としてというよりは、むしろ周縁的位置自体がもつ両義性と相関関係にあるものとして理解し、ベルクマンが強調したレチフのテクストの揺れを別の観点から理解することを試みた。

より具体的にはつぎの三つの観点を重視した。

⑴第一に「文芸」（古典主義）から近代的な「文学」への時代的変遷のなかでレチフの文学がどのようなものであったのかという詩学・美学的な観点。

⑵第二に、彼が文学場の周縁に位置し、自己の言説の正当性や書く資格をつねに疑問に付される存在であったという歴史社会学的な観点。

⑶そして最後に、宗教や血統と無縁な場所で自己の根拠を欠いたところから主体を立ち上げなければならなかったという哲学的・精神分析的な観点である。

本研究はレチフのテクストが内包する揺れや両義性をこの三つの観点の相互関係を視野におさめながら考察し、そこから近代の文学的エクリチュールの主要な特質を明らかにすることを目的とするものであった。

３．研究の方法

以上の三つの視角を踏まえ、資料読解を基本的な方法として、次の五つの課題に取り組んだ。

⑴レチフの文学場における周縁的地位と彼のテクストの揺れや両義性との関係についての研究。

⑵レチフの文学的後生：レチフが後生の文学に与えた影響や、レチフ文学が 19 世紀以降の近代

文学をいかなる意味で先取りしているかについての研究。
⑶自伝とフィクション：疑似回想録（pseudo-mémoires）や一人称小説の歴史をふまえレチフにおける自伝とフィクションの交錯について考察する研究。
⑷そのような自伝的テクストとルポルタージュ的言説の関係についての研究。
⑸書簡体小説と監視・窃視の問題にかんする研究。

４．研究成果

⑴文学場における周縁的地位とテクストの両義性

農民出身で印刷工から作家となったレチフは、文学規範から逸脱した二流の作家として批評家からつねに低い評価を受けてきた。彼は文学場の周縁にいたと言うことができる。初期のいわゆる「奇想物〔Les Idées singulières〕」である、売春施設改革論『ポルノグラフ』（1769）や演劇改革論『ミモグラフ』（1770）は、論考的内容を持ちながらも書簡体小説の体裁で書かれたものだったが、レチフ自身はこれを作家としての名を明らかにせずに刊行した。ここでは、公論の場で主張をしながら匿名を保つという両義的身振りが、改革論を小説で書くというジャンルを混淆する行為と密接に関連しながら展開されているのである。

レチフの作家としての低い位置は、古典古代以来、有名作家の背後でゴーストライターの役割を果たしてきたとされる一族の末裔ソッタントゥ〔Sotentout：いわば「何でも阿呆田氏」〕を主人公とする『パリの夫婦〔Le Ménage parisien〕』（1773）のうちにも典型的に現れている。レチフはこのパロディ小説において、ゴーストライターが決して自分固有の作品を持ちえないことを、妻の不貞のため夫が自分の子供を持てないことと対にして描き出した。一八世紀にいわゆる催涙喜劇や市民劇で典型的に主題化されたブルジョア家族の道徳と親子関係の問題は、こうして、文学場における承認と作品制作の生産性の問題と密接に絡められて表現されることになったのである。

周縁的存在が強いられる不幸な人生が行き着く先は死にほかならない。レチフ文学においては主人公の死に大きな意味が付与され、それが、残された家族にとっての道徳的教訓、遺言による新たな農村家族共同体の設立、あるいは没後作品を通しての作家名声の確立といった問題として展開されている。たとえば、『堕落農民』（1775）の最後に見られる主人公たち(エドモン、ユルシュル、パランゴン夫人)の死と遺言は、道徳的教訓と共同体設立につながるものであり、また、『父の呪い』（1779）の主人公デュリは、父の呪いをうけて数々の不幸を被り、結局、まさに死ぬことによって作家主体を確立することになる。こうした展開のうちには、マイナー作家レチフの願望、すなわち現世では報われないが、後世においては名声を得たいという希望を読むことができる。最晩年の書簡体小説『没後書簡〔Les Posthumes〕』（1802）は、死期を覚った夫が妻に向けて手紙を書きため、知人に頼んで死後一年にわたりそれを妻に届けさせることで妻に自分の死を受け入れる準備をさせるという作品であるが、ここにも没後の名声というレチフの欲望を読み取ることが可能である。

父と息子に焦点をあてるレチフ文学はきわめて家父長制的である。しかし、諍いの絶えなかった妻アニェスをモデルとする『浮気な妻』（1786）には、そうした男性中心主義を――レチフの自覚的意図を裏切るかたちで――相対化するようなテーマが含まれている。レチフを思わせる主人公は、妻がくだらぬ恋文の執筆に時間をかけて家事を顧みないばかりか、作家になることすら夢見ていると言って非難する。だが、これは本質的に、マイナー作家レチフに向けられた批判そのものである。興味深いのは、レチフは自分の若書きの作品を妻の作品として示していることである。女性の従属的地位を文学場の周縁的地位とひそかに結びつけて描き出すことで、レチフは家族関係と文学との関係に新たな表現を与えることになった。

作品=子供を持てぬ周縁的作家は、死ぬことで子供を獲得し、作家としての地位を獲得する。しかし、その作家=父としての地位から妻に向けられる批判は、みずからが受けた酷評を再現するものであって、ほからならぬ妻のうちに自分のマイナー作家性が再度描きこまれることになる。レチフのテクストはこうした幾重もの揺れや両義性を内包するが、それは彼が置かれた周縁的位置の両義性と相関するものと考えられる。

以上の成果のうち、『ポルノグラフ』と『ミモグラフ』については「周縁性と両義性――『ポルノグラフ』とレチフ・ド・ラ・ブルトンヌの初期作品をめぐって」と題した論文を発表した（『虚実のあわいに Le Fictif, ou le réel 大浦康介退職記念論文集』、p. 179-187）。また、『パリの夫婦』、『父の呪い』、『浮気な妻』を中心にとりまとめたものについては、2017 年 9 月 23 日に開催された国際シンポジウムにて口頭発表を行い、京大人文研欧文紀要に論文として発表した（« L'autorité paternelle et l'auctorialité mineure : sur le sujet de l'écriture chez Rétif de La Bretonne », *Zinbun*, n° 49, p. 156-171）。

⑵レチフの文学的後世

パリの民衆世界を描いたレチフの文学は、しばしばバルザックのリアリズム小説の先駆として評価されてきた。実際、盗賊=怪僧のヴォートラン（カルロス･エレーラ)の造型は『ムッシュー・ニコラ』（1797）や『堕落農民』に登場するゴーデ・ダラスと大きな類似を示しているし、バルザックが創始した人物再登場の技法はレチフの作品に同じ人物たちがくり返し登場する事実を思わせずにはおかない。フランス社会全体を作品で表象しようとする『人間喜劇』の企図は、

たとえば『国民婦人年鑑――日めくりフランス女性物語』（1791-1794）に見られるようなフランス全体を個々の人物の物語を通して表現しようとするレチフ文学と大きな親近性を持っている。

他方で先に見た、自己の死を通して作家としての聖別をえるというプロセスは、ヴィニーの『チャタートン』（1835）に典型的に見られるような、社会から理解されずみずから命をたつロマン主義的天才としての詩人像につながっていく。社会の周縁的存在が抱く夢想のうちにこそ文学の可能性があるとするこうした姿勢は、『ムッシュー・ニコラ』を換骨奪胎して『ニコラの告白』を書いたネルヴァルにも見られるものである。その先には、ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメなど象徴主義的な「呪われた詩人」の系譜が現れることになろう。

第三に、レチフが執拗に描き出した、過去の想起と失われた存在に対する喪の作業は、世紀前半のプレヴォの小説――『ある貴紳の回想と冒険』におけるルノンクールやデ・グリュの喪と回想――を引き継ぎながら、20 世紀になってプルーストによって展開される過去と記憶の問題にもつながるものでもある。『45 歳男の最後の恋』（1783）および『ムッシュー・ニコラ』に現れる「サラの物語」は、中年男レチフがサラとの幸福な将来を思い描きながら、やがて彼女の素行の悪さに気づき、彼女に振られた後はその喪失を思って涙を流すにいたるプロセスを描いている。これは文学言語が、未来へ向けられた行動指針的なもの（いわば「プロ=グラム（前もって書かれたもの）」）から過去と記憶に向けられたもの（いわば「メタ=グラム（後から書かれたもの）」）へと変化していくプロセスを示した作品として読むことができる。サラとの出来事はサン=ルイ島の岸壁に書きこまれ（これは『わが碑銘』として収録される）、レチフは後にそれを見て涙を流す。ときに『消え去ったアルベルチーヌ』との類似を指摘されるレチフ作品には、プルーストに代表される現代文学が特権的なトポスとして持つ過去と記憶の問題が鮮烈に現れているのである。レチフは『わが暦』では、自分が出会った女性に――聖人の記念日のように――それぞれ記念日を割り当て、彼女たちを記憶と文字のうちに定着させることを試みている。

一九世紀以降、レチフの正確な実像は急速に忘却される一方、レチフを主人公として描いたアレクサンドル・デュマの『アンジェニュ』(1854)が多くの虚構を含むことからも理解されるように、作家は「文学的神話」の一形象として記憶されるようになった。しかし、レアリズムと文学のナショナルな次元、自己の死を通して逆説的に実現される不可能な文学、喪と記憶の作業やそれを通して実現する創造――レチフ文学を特徴づけるこの三つの問題はそのまま一九世紀以降の近代文学の本質的な構成要素と言ってよい。

残念なことに完全に文章化するまでにはいたらなかったが、研究期間を通して以上のような三つの論点を明確にすることができた。

⑶自伝とフィクション

レチフはルソーの『告白』（1781/1788）に張り合うようにして自伝作品『ムッシュー・ニコラ』を執筆した。ルソー的な誠実で網羅的な真実の語りを前面に押し出すこの作品は、しかし事実だけでなくフィクションも含む。出世作『堕落農民』が典型的に示しているように、レチフは自分の半生を素材としつつもそれを自在に「変奏」することで作品を書いていた。こうした「自伝とフィクション」の混淆は多作の売文家のデタラメなのか、それともそこにはなんらかの意義があるのか――。2013 年の論文（「主体、欠如、反復――レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ムッシュー・ニコラ』と虚構的自伝」、『人文・自然研究』第 7 号）においては、この問題を「別ヴァージョンの人生の創造」と読み解くことを試みたが、本研究では、18 世紀前半のフランス文学に現れた文学潮流、とりわけ書簡体小説、回想録小説（一人称小説）、ピカレスク小説、「農民物」を実際に繙き新たな観点から考察することを試みた。

レチフが書簡体小説の体裁で『堕落農民』を書いたとき、先行作品として、書簡体小説ではとりわけリチャードソンの『パミラ』（1740）、『クラリッサ』（1748-1749）、ルソーの『新エロイーズ』（1761）が、回想録小説ではプレヴォの『ある貴紳の回想と冒険』（1728-1731）が、ピカレスク小説ではルサージュの『ジル・ブラース』（1715，1724，1735）が、そして農民物としてはマリヴォーの『成り上がり農民』（1734-1735、未完）や『マリアンヌの生涯』（1731-1742、未完）、ムーイの『成り上がり農民娘』（1735–1737）、マリー=アンヌ・ロベールの『哲学者農民娘』（1762）などが存在していた（レチフは 1775 年にケベードのピカレスク小説『ドン・パブロス』の翻訳を『大悪党〔Le Fin Matois〕』と題して刊行しているし、前年には『新・貴紳の回想録』と題する作品も出版している）。こうした諸潮流に棹さしながら、レチフは、有徳性に基づくことで可能とされていた「成り上がり」という社会上昇のテーマを「堕落」へと反転させ、上昇の不可能性と悪徳のテーマを前景化させたが、なによりも先行作品の著者たちとは異なり、彼自身が農民の出身であったために、すでに豊かな作例を持っていた農民物（およびそれに関連するピカレスク小説）と彼自身の人生とが直接的に結びつくことが可能となった。レチフはこうして自己の人生を出発点としながら(自伝性)、それを既存の文学ジャンルが開いた様々な物語にならって「変奏=フィクション化」することができたのである。自己のアイデンティティ（農民性）をすでに流布している物語類型に接続できたことは、レチフが作家として自己実現を果たすうえで、決定的に重要なできごとだった。これによって、レチフはオリジナルな作品を書くことができるようになり、そして、作家になることができた、と言っても過言ではない。

以上の内容については、2020 年 5 月 30 日の「レチフ勉強会」（Zoom 開催）で「レチフの自伝的作品『堕落農民』と『ムッシュー・ニコラ』の理解にむけて――その文学史的前提」と題して報告を行った。

⑷/⑸自伝とルポルタージュ、および、書簡体小説と窃視／盗聴

自伝文学は文学史的に遡ると、18 世紀前半の回想録小説(一人称小説)や 17 世紀後半の疑似回想録に行き着く。クルティ・ド・サンドラの『LCDR 回想録』(1687)の語り手はおもにリシュリューの密偵的使命を帯びて活躍し、その過程で知りえた政治の裏面・逸話を語る。ルサージュ、マリヴォー、プレヴォの一人称小説は窃視・ 盗聴の場面を含み、さらに副次的人物がみずからの半生を物語ることで主筋に様々な逸話が挿入される構造をとるものである。密偵的な活動を行う語り手の回想に、副次的人物の自伝的な語りが挿入されるムーイの『密偵』(1736-1742)はこれらの特徴を集大成した作品であった。

レチフが虚構的自伝作品を書き始めた 1770 年代、文学はすでに、こうした自己告白と他者暴露が交錯する複雑な語りの空間を持っていたのである。ルソーの『告白』に刺激されつつも虚構的物語性を含む点で明らかに異質な側面を持つ 『ムッシュー・ニコラ』、メルシエのルポルタージュ文学『タブロー・ド・パリ』（1781-1788）に触発されながらもそこに一人称の語りと副次的逸話を何重にも織りこんだ 『パリの夜』（1788-1794）が書かれえたことは、こうした観点から理解できる。他方、この「ポリフォニックな一人称の語り」は（手紙の書き手各々が語り手となる）書簡体小説の隆盛となっても現れるが、それは特権的な男性の語り手としての「私」の失墜をも意味するものだった。『堕落農民娘』のユルスュラは自分を教化する男性たちの言説を逆手にとって女性としての自由を主張するし、死後に届けられる夫の手紙を集めた体裁をとる最晩年の『没後書簡』はエクリチュールの主体がすでに不在の存在であることを示している。レチフの諸作品は以上のように、世紀後半に生じた大きな転換(文学的モダニティの生成)を鮮明に示すものだったのである。

以上についてはほぼ文章化するところまで進めることができたので、早急な発表を試みたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Atsuo MORIMOTO	４．巻 49
２．論文標題 L'autorite paternelle et l ’ auctorialie mineure : sur le sujet de l ’ ecriture chez Retif de La Bretonne	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Zinbun	６．最初と最後の頁 156-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Shojiro KUWASE, Dinah RIBARD, Atsuo MORIMOTO	４．巻 49
２．論文標題 Qu ’ est-ce qu ’ un auteur “ extraordinaire ” ? a partir des marges du champ culturel a l'age classique	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Zinbun	６．最初と最後の頁 123-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 森本淳生	４．巻 n.a.
２．論文標題 周縁性と両義性――『ポルノグラフ』とレチフ・ド・ラ・ブルトンヌの初期作品をめぐって	５．発行年 2019年
３．雑誌名 虚実のあわいに Le Fictif, ou le reel 大浦康介退職記念論文集（久保昭博・河田学・岩松正洋編）	６．最初と最後の頁 179-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Atsuo Morimoto
２．発表標題 L ’ autorite paternelle et l ’ auctorialie mineure : sur le sujet de l ’ ecriture chez Retif de La Bretonne
３．学会等名 Litteratures et aurotires (Colloque international organise par Yasushi Noro, Institu franc;ais Japon-Kyushu, le 23 septembre 2017)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 森本淳生
２．発表標題 レチフの自伝的作品『堕落農民』と『ムッシュー・ニコラ』の理解にむけて ――その文学史的前提
３．学会等名 レチフ勉強会；藤田尚志（九州産業大）、辻川慶子（白百合女子大）、石田雄樹（東北大）、郷原佳以（東大）とZoomにて開催
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 野呂康，森本淳生，他	４．発行年 2021年
２．出版社 吉田書店	５．総ページ数 336
３．書名 GRIHL2 歴史記述から権威を読み解く - 文学に働く力，文学が発する力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考